

# 白藍塾オリジナル

## 2010入試小論文分析&解答のヒント

2010年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

### ●慶応・法学部

古代ギリシャ時代に題材をとった問題だ。都市国家であるアテーナイとラケダイモンが二大勢力として古代ギリシャを安定させていた。ところが、アテーナイが勢力を伸ばしてきたため、コリントスがアテーナイと戦闘を始めた。コリントスの同盟国であるラケダイモンに対して、コリントスとアテーナイから申し入れがあったが、どちらの言い分を聞き入れるべきかを答える問題。

コリントス側の意見をまとめるとこうなる。「ペルシャに対してギリシャ全体が団結して戦った後、都市国家のひとつであるアテーナイが強い実行力によってギリシャ全土を統治してきた。現在も、アテーナイ人は次々と機能的に物事を行い、国外を侵略して利益を得ようとしている。手をこまねいている間にほかの都市国家を隷属的な状態にしつつある。それに対してコリントスは戦いを挑んだ。コリントスと同盟関係にあるラケダイモンの人々がそれを傍観するのは罪である。援助していただきたい」

それに対して、アテーナイ側の意見をまとめると、こうなる。「アテーナイ人こそが最善を尽くしてペルシャ軍を退けた。その後、ギリシャを守るために統治してきた。それなのに、各地の人々から嫌われるので防衛をした。それだけなのに、アテーナイは非難を受けている。戦争をしようとするのではなく、冷静になって平和を守るべきだ」

いうまでもなく、ここに描かれるアテーナイは、現在のアメリカ合衆国を思わせる。第一・二次大戦後、世界各地に軍隊を置き、自分たちの価値観で世界を安定させようとしてきたが、そのほころびも出ている。それに対立していた勢力のひとつが戦争を始めたら、そこと同盟関係にあった国はそれに加わるべきかが問われている。

「コリントスとの同盟を強めてアテーナイと戦争するべきだ」という立場からは、以下のよう  
な意見が可能だ。「アテーナイの統治を許すと、ますますひとつの価値観で世界を統治する  
ようになり、すべての国が属国になってしまう。それらの国では自由がなくなり、国民の意  
志が反映できなくなる恐れがある。また、アテーナイがすべての富を独占するようになり、  
長期的にはいっそう激しい対立が起こる。目先の平和を願うよりも、自国の自由を重視して、  
コリントスを援助するべきである」

逆に、「アテーナイ側の言い分を聞き入れて、和平を守るべきだ」という立場からは、「ア  
テーナイの統治によって平和が維持されたのは間違いない。アテーナイ軍の存在が都市国家  
の侵略につながらないように法的に歯止めをかけたうえ、それぞれの都市国家は、軍事以外  
の経済力をつけるなどして、将来的にアテーナイに負けない政治力をつける努力をするべき  
であって、戦争をするべきではない」などの論が可能だ。また、「アテーナイとコリントスの  
仲介を行い、アテーナイによるギリシャ統治を緩め、外敵が存在しない場合には、ギリシャ  
全体をすべての都市国家で共同管理するように提言するべきだ」といった妥協的な意見も可  
能だ。

「どんな立場だろうと戦争はよくない」という立場をとって、一般論として反戦を主張する  
と論が成り立たなくなる。とはいえ、もちろんあまりに好戦的な態度を示すのは好ましくな  
い。いずれの立場をとるにしてもしっかりと反対意見を考慮することが求められる。

◎執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>